欠けたカドリード

空無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
欠けたカドリード

【Ｎコード】
Ｎ８６７６Ｄ

【作者名】
空無

【あらすじ】
今日も今日とて由宇衣は夢宇衣の部屋へと駆け込んでくる。夢宇衣は上手くいっているのに、どうして由宇衣は上手くいかないんだろう？

奇妙な一対がある。いや、いる。
多分誰に聞いても、異論のないひとはいないだろう奇妙なふたり。困ったところは、彼ら（特に片方）が自分達がある意味変わっているという事実を自覚して制御していないことだろう。
そして彼らに近しいひとは、『それ』がある度に思うのだ。
それは仕方がないんじゃないか、と。

＊　＊

ばたんどたんと、レコードならずとも古いコンポなら音飛びが発生しそうなほどの激しさで、階段を上ってくる人物。その該当者などひとりしかいない上、理由も分かったので、夢宇衣は大人しく読んでいた本を閉じた。
今度はえらく早かったな、と、本人が知ったら火に油を注ぎそうなことを考える。勿論、実際に口に出すことなどしないが。夢宇衣だって、命が惜しい。

「むぅいーっ」

やはり予想通りに、誇張表現でなくドアを蹴破って現れた由宇衣に、夢宇衣は溜息をつくしかない。これで一体、何度目の破壊だろう。
五回目を過ぎた辺りで数えるのが馬鹿らしくなったから、数は分からないが。

「とりあえず話は聞くから……後でドア直せよ」
「そんなことはどーでもいいのよ！　あー、もうっ　ムカつくった

らないわ！」
「言っても無駄なのは分かってるが、落ち着け」
興奮している由宇衣というのは珍しいものではない。むしろ冷静な由宇衣なんて方が、見世物になるほどレアだ。夢宇衣と足して二で割れば丁度いい、とは、関係者の言。
由宇衣は夢宇衣が差し出した飲みさしのコーヒーを一気に呷ってから、ようやく動きを止めた。
「確か中本だっけ」
とりあえず確認に、夢宇衣が尋ねる。だが返ってきた答えは、思っていたものとは違った。
「違う。橋崎正輝」
「……中本は？」
「誰だっけ」
「おい」
いつの間に、と顔に疑問符を乗せる夢宇衣を無視して、由宇衣は夢宇衣の近くの床へと座り込んだ。本来敷く筈の座布団を、むぎゅりと抱き潰している。
腹を立てているのだとは分かるのだが、見た目はただ拗ねているようにしか見えない。得な性分といっていいのか、損な性分といっていいのか、こういうときは判断に迷う。
ああ見た目はこんなにも愛らしいのに、と、何処か諦めたように夢宇衣は溜息をついた。
「まぁいいや。んで、橋崎正輝ね……。同校？」
「浦澤商業」

「……ああ、それで」
「何が」
夢宇衣が知らない短期間のうちに終わった理由が分かって、思わず呟いた台詞だった。由宇衣の棘の刺さった台詞を故意に無視して、話を続ける。下手に話を膨らませたら、矛先がこっちを向く。それは避けたい。
「今度は何て言われたの」
「アイツらにバリエィションなんてあると思う？」
「……まぁ、今までは判で押したようなものばっかりだったけどさ、たまには宙返りみたいな捨て台詞吐く奴がいるかなって」
しかしどうやら思った通りに、聞き飽きた台詞で締められたらしい。いい加減耳にタコができているのだが、言っている本人側はそうではない。
多分まだ増えるだろうな、と夢宇衣は冷静に思った。
由宇衣の性格が性格なだけに。
「宙返りどころか、前転さえしないような連中よ」
「……由宇衣、そういうのを選んだのはオマエさんだろ」
「違うわよ。美羽がいい男いるっていうから」
……由宇衣に彼を紹介した、もとい、彼に由宇衣を紹介しようとした彼女が天晴れだ。
美羽という名には聞き覚えがある。夢宇衣が知っている程度に由宇衣と付き合いがある友人だ。けれど、そういえば彼女は家に遊びに来ていない。夢宇衣は直接の面識はなかった。
面識があれば、そんな無謀なことはしない筈なのだ。

「で、今度の一言一句は？」
「えーと、『俺を代わりにするな。オマエ誰と付き合っても同じだから、いっそ映画になるくらい突っ走ってくれ』だったかな」
「……側転くらいはしてる台詞じゃないか？」

ウィットに富んでいるわけではないが、結構余裕のある捨て台詞だと夢宇衣は思った。橋崎という人物は、元々が結構ユニークなのかもしれない。
知らないまま終わってしまったのは残念だった。

「しかしまぁ……ものの見事に僕と由宇衣を誤解してるな」
「アンタの頭ん中こそどうよって言ってやったわよ」

まだまだ腹立たしさを抑えられないらしい由宇衣を放っておいて、夢宇衣は立ち上がった。コーヒーを飲もうとして、由宇衣に飲み干されたことを思い出したからだ。

「美紗都くらい理解あるといいんだけどねぇ」
「ミィサはいい女だよねぇ……。夢宇衣が羨ましい」

美紗都というのは夢宇衣の一年半付き合っている恋人だ。彼女の方が年上なせいか、夢宇衣と由宇衣の関係も結構余裕を持って眺めていたりする。由宇衣も、美紗都のことが大好きだった。
ここのところの関係は非常に良好なのだが。
由宇衣の彼氏となると、いまだかって良好に続いた例がない。

「僕は日々努力してるよ。いい男になろうって。……しかしまぁ、由宇衣の方は、一番長く続いたのが三ヶ月って辺りがあれだよな」
「何よ」

しかもシングルの期間も長くて三ヶ月。サイクルが早すぎないかという夢宇衣の疑問もある意味尤もではある。下手な鉄砲は打てば当たるかもしれないが、それが当たりとは限らない。

「僕の一番は由宇衣だし、由宇衣の一番は僕だろうけどさ。恋人は別格でなきゃ」

崖の両端でふたりが助けを求めています。というベタな二択を迫られたときに、何時間経っても答えが出ない自分を許容できるような相手でなければ自分達の相手などできない。

美紗都はそれができる女性なのだ。

それは夢宇衣との関係が遊びだからではなく、比べるものではないと判断しているのだ。実にいい女である。

「由宇衣、そういう男をちゃんと選んでる？　付き合ってみれば好きになれるかも、だけじゃ、関係は成熟しないよ」

「うっさい」

ばしり、と座布団を投げつけられる。それにからからと笑いながら、夢宇衣はコーヒーを淹れるためにキッチンへと向かった。

ひとりきり残された由宇衣が、呟く。

「夢宇衣みたいないい男がいればいいんだけどなー」

正にその願望こそが、由宇衣がいい男をゲットできない最大の理由であった。

＊　＊

夢宇衣と由宇衣は双子である。

けれどふたりが出会ったのは、中学校に上がってからだ。夢宇衣は叔母夫婦へと養子に出されていたので。

勿論ふたりは当初から仲がいいし、その間にあるのは純然たる姉弟愛なのだが、経緯が経緯なだけにそれが少々捩れている。何処までパーソナルスペースに踏み込んでいいかの境界線が、姉弟としてはおかしいのだ。

そして主に、ワリを食っているのが直情径行な由宇衣の方なのである。

今日も由宇衣は、いい男を求めて叫んでいる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8676d/

欠けたカドリード

2011年10月4日20時28分発行